

市民科学講座 報告

災害のときのラジオ コミュニティのための番組をいかにつくるか

瀬野豪志 (NPO 法人市民科学研究所・理事)

日時：2018年11月23日(金・祝) 14時～16時30分

場所：光塾 COMMON CONTACT 並木町

ゲスト：佐々木健二 (株式会社ジェイクランプ代表取締役)

長崎励朗 (桃山学院大学准教授)

司会：瀬野豪志

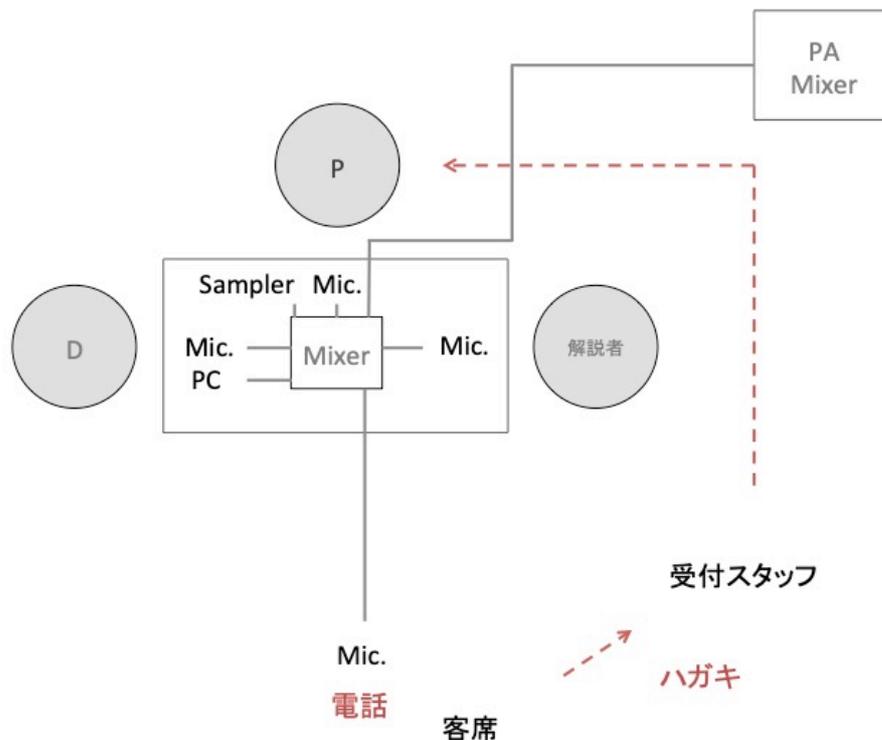
音声を聴きながらおしゃべりをする、ラジオ番組

市民科学研究所では、レコードや放送などの録音資料を聴きながら「音響技術」と「社会」「文化」の関わりについておしゃべりをする「蘇音カフェ」というイベント(十一人劇場)を開催しています。

昨年の11月23日に開催した、市民科学講座「災害のときのラジオ コミュニティのための番組をいかにつくるか」は、「蘇音カフェ」と同様に、音声を聴きながらおしゃべりをするスタイルで、音響技術についての公開講座として実施しました。日本における「コミュニティFM」というラジオ放送について、ラジオ番組の形式で、ラジオに詳しいゲストと「トーク」を進めていき、その舞台をコミュニティFMの放送局のスタジオのように見えるようにして、客席のみなさんにも「ハガキ」の投稿をうながして「番組」に参加してもらうという、模擬的なラジオ番組をやるようなトークイベントでしたので、「市民科学講座」としては一風変わった趣向だったかもしれません。

ラジオ番組の形式で進められたラジオについての「トーク」は、コミュニティFMとはど

ういうものなのかという話から入り、コミュニティFMについての貴重な経験談、地域色の豊かなエピソード、震災のときにラジオで起きていたことがたくさん紹介されることによって、日本のコミュニティFMの歴史的な経緯や、これまでのラジオの歴史についての話が絡み合い、とても有意義な内容になりました。今回の講座のゲストである佐々木健二さんと長崎励朗さんの親しみやすい語り口のおかげで「トーク」そのものが面白いものになり、本当に「ラジオの番組」をやっているかのようなようでした。初めて番組をやることになった「素人のパーソナリティ」としても、とても楽しい時間でした。あとになって気づくのは遅いかもしれませんが、「市民科学講座」でこのようなことをしてよかったのかと、少し心配になったくらいです。



ラジオについてのラジオ番組という設定

会場の舞台では、ラジオの「番組」のように、瀬野は「素人のパーソナリティ (P)」として司会・進行役となり、今回の講座のゲストの佐々木さんと長崎さんは向かい合って座っており、三人でラジオについてのトークをしました。

舞台の卓上にある「Sampler（ポンと押して音を出す機械）」と「PC」は、番組の流れに合わせて音声流せるように「PA（会場の音響設備）」につながられています。会場で流すための音声として、「災害のときのラジオ」についての録音資料（東日本大震災のときに放送された音声）の他に、「ラジオ番組」のような進行にするための音楽も用意しました。

客席の参加者には、「ハガキ」のような投稿用紙が配られて、「番組」へのメッセージを投稿することができるようになっています。舞台での「番組」のトークのなかで、「ハガキのお題」を伝えて、客席からのハガキの投稿を募集しました。「電話」は、実際に使うことがありませんでしたが、出演者（登壇者）とリスナー（客席の参加者）が会話をするときのために用意していたマイクのことです。

当日は、途中の休憩をはさんで、前半（60分）と、後半（60分）の二部構成で進められました。前半は「素人のパーソナリティ」と二人のゲストによる番組としてのトークをしました。後半は、舞台の三人を「素人のパーソナリティ」、「番組のディレクター（佐々木さん、D）」、「ゲストの解説者（長崎さん）」に変えて、模擬的な番組の流れを繰り返しながら、投稿されてきた「ハガキ」についてのチェックや、番組の前後の打ち合わせのようなシチュエーションでのトークをしました。

前半の番組：これまでの災害とラジオ 日本のコミュニティ FM

前半は、「素人のパーソナリティ」の素朴な質問をゲストにぶつけてみるという形で、日本で増えてきている「コミュニティ FM」とはどのようなものなのか、という話題から始まりました。

日本では、災害のときにラジオが有効であるという考え方が定着しており、その代表的なものとして、1992年に放送法施行規則改正によって制度化された「コミュニティ放送」、いわゆるコミュニティ FM があります。コミュニティ FM は、原則として市町村の単位で開局が認められているラジオ放送で、2019年2月現在、全国に325局あります。

コミュニティ FM は、特定の市町村を中心とするエリアで聴くことができるラジオ放送ですが、インターネットで全国のどこにいても聴くことができるようになっています。地域のために制作されている番組が全国でも聴かれる可能性があるという点が、私には面白いことのように思われるのですが、インターネットでの放送は「サイマル放送」といわれており、もともとは電波が届きにくい場合のための「同時（サイマル）放送」として認められているものなので、全国どこにいても、あるいは海外にいても聴くことができるようになっているのは、たまたまの歴史的な経緯でそうなっているということのようです。技術の意味が変わ

っていく歴史として、とても面白いことのように思います。コミュニティFMのサイマル放送を聴くことができるアプリでは、世界のコミュニティFMが聴ける「TuneIn Radio」や、「ListenRadio」が使いやすいようです。

わたしがコミュニティFMの「サイマル放送」を面白いと感じている理由は、たとえば、かつて住んでいた地域から離れた人が「故郷」のコミュニティFMを聴くことや、番組の制作者にとっては、地域のための番組作りをしながら全国に向けて放送・配信することができるからで、それは従来の全国的なネットワークによって放送されている番組とは異なる内容になるのではないかと期待するからです。そのほかにも、日本のコミュニティFMには、まだ発見されていない可能性があるのではないかと思います。

災害のときにラジオが活躍しているということは、テレビやドラマでも伝えられています。しかしながら、それがどういうことなのかはあまり知られていないかもしれません。たとえば、災害のときのラジオという考えには、行政との制度的な関係が含まれています。コミュニティFMがある地域では、自治体とコミュニティFMは「災害のとき」の放送に関する協定を結んでおり、災害のときには、自治体が「臨時災害放送局」の免許を総務省から受けて（電話での口頭でも即日交付される）、コミュニティFMの放送局に「災害時の放送」を要請するということが、災害の前に考えられています。自治体が発表するライフラインに関する情報、避難所の情報などが「臨時災害放送局」から伝えられることになっています。ただし、「臨時災害放送局」になると、コミュニティFMとしての通常の番組の放送はできなくなります。また、コミュニティFMがない地域では、災害が起こったときに「臨時災害放送局」を立ち上げることをしなければ、自治体による市町村の単位での「災害のとき」のラジオ放送はないということになります。全国的にみれば、コミュニティFMがない自治体の方が多くでしょう。

最近の日本では、災害のときのラジオとしてコミュニティFMがあるように考えられていますが、もともと、コミュニティFMは、ミニFMが盛んだった湘南や、函館山のロープウェイのような、観光地のラジオ放送の開局から始まっており、「災害のとき」のためのコミュニティFMという考え方は、阪神・淡路大震災以降に強く意識されるようになり、その後、災害があった地域を中心にしてコミュニティFMの開局が増えていくことで広まっているようです。被災地で新たに立ち上げられた臨時災害放送局が、コミュニティFMとして存続するケースもあります。東日本大震災のときにも、日本民間放送連盟研究所の「東日本大震災時のメディアの役割に関する総合調査」によると、被災地で役に立ったメディアとしてラジオが一番に挙げられています。「災害のとき」にラジオが使われるというのは、このような調査の数字にも現れています。

それにしても、災害のとき、どうしてラジオが使われているのでしょうか。停電していても、乾電池でも長持ちすることや、カーラジオで聴かれているという理由もあるようですが、佐々木さんが指摘するのは、災害のときのコミュニティFMで起きているのは、「リスナー」が主役になるということで、たとえば、熊本地震のときにコミュニティFMに寄せられたメールの内容をみると、リスナーからリスナーへ呼びかけることがラジオで始まっていくのがよくわかるといます。時間が経つにつれて、生命に関わる情報から生活の情報へと変化していく過程があり、次第に、前向きにやっぴいこうというメッセージになり、リスナーからリスナーに向けて「〇〇しましょう」という呼びかけがラジオを通じて行われるようになる。たとえば、近隣への情報提供や救助の要請から始まっていた「呼びかけ」のメッセージが、「エコノミークラス症候群を予防するためには〇〇しましょう」というような呼びかけになり、そして、周りへの気遣いや労いのメッセージに発展していく過程があり、佐々木さんというには「将来への希望」や「鎮めようとしている」ものもある。

熊本地震のときについての佐々木さんの指摘を参考にして、ここで、東日本大震災のときにラジオで放送されていた音声を流しました。

<東日本大震災 発災時の放送の音声 A> 宮城県登米市のコミュニティFM

<東日本大震災 発災時の放送の音声 B> 岩手放送(地域の放送局)

<東日本大震災 リスナーからリスナーへ呼びかける音声>

「停電で…在宅で酸素吸入をしているわけですが…電話が途中で切れてしまいました…酸素ボンベ、残りがわずかです…〇〇村の近くでこの放送をお聴きの方、医療関係の方、対応ができればよろしく願います…」

リスナーからリスナーへ呼びかけるラジオ放送の音声を聴いて、長崎さんが指摘したのは、ラジオの特徴は「選択的な接触」ができないことにあり、だから「災害のとき」にはラジオが大事になるのではないかと、ということでした。スマホも「速報性」と「携帯性」ではラジオと同じようなものであるが、その違いは、ラジオでは自分で選択していない情報が飛び込んでくるということにあり、災害のときには、それがラジオの強みになる、と。

確かに、自分で検索して情報を探していくだけでは、偶然の「出会い」の可能性は限られています。行方が分からなくなっている人の安否情報や、生命に関わる情報、救援を要請する情報は、それぞれのローカルな状況に依存しています。「あ、これは、すぐ近くじゃないか、行ってみよう」と、偶然、ラジオを聴いたことによって行動が始まるような、近隣での

反応が起こる可能性が大事になるのでしょうか。ラジオが媒体となり、リスナーからリスナーへ呼びかけることが発生することによって、いろんなコミュニケーションが同時に連鎖していき、その呼びかけに応じて見知らぬ人が一役買って動いてくれたり、思わぬ偶然によってメッセージが届けられたりする可能性があるというのが、「災害のとき」のラジオで起きているようなのです。

後半の番組：これからのコミュニティFM 情報を提供する

後半は、「ディレクター」の佐々木さんによる、ラジオの番組がどのように進められているのかについてのレクチャーから始まり、「素人のパーソナリティ」だけでなく、「ゲストの解説者」の長崎さんも、番組の冒頭からの流れをやってみるといって、「ラジオ道場」のような展開になっていきました。実際に番組のようにやってみると、なかなか難しいものです。番組の「トーク」をしているところに、ディレクターからチェック済みのハガキが渡されるというのをやってみましたが、番組の「トーク」にいかにつなげられるかというのが一番の聴かせどころになるのでしょうか。うまくいかないのも含めて、後半の「ラジオ道場」のような形式は、「素人のど自慢」のような娯楽性があるようにも感じられました。

また、会場の客席から投稿されてきた「ハガキ」の内容について、ラジオ番組の「ディレクター」はどのようなところを見ているのか、番組で「ハガキ」をどのように活用しているか、その大事なポイントも、佐々木さんから実践的なレクチャーを受けました。ラジオ番組で大事なことは、ことばから「深掘り」できるかどうかということで、たとえば、「鉄道が好き」とあるなら、さらにその理由もあれば、そのことばから人柄についての話にもなるし、他の話題にも展開していけるとのことでした。「深掘り」は、ラジオの番組に慣れていくために大切なポイントであり、また、「災害のとき」のラジオへの情報提供に関わることもあります。

素人としてやってみてわかったのですが、実際のコミュニティFMの放送においても、「ディレクター」や「アナウンサー」のようなラジオに慣れている人が出演し、ラジオに出演したことがなかった人と「ラジオについて」トークする番組があるといいのではないかと思います。前半のような、音声資料を扱う番組も含めて、「ラジオについてのラジオ番組」が、これからのコミュニティFMの可能性を発見することにもつながるのではないのでしょうか。ラジオの「番組」の専門的な技術のサポートがあることによって、ラジオの番組に慣れていない人でも「ことば」や「人柄」などが引き出されるでしょうし、そのやりとりが「コミュニティの番組」の可能性についての発見につながるのではないかと思います。

後半の形式では、リスナーから投稿された「ハガキ」をチェックするところや、「パーソナリティ」が番組の進め方を練習しているのを見せることを意図していましたが、考えてみれば、「スタジオ」の様子を実演することは「ローカル」なラジオ放送局が生まれる過程を見せるということになります。ラジオ番組が生まれていく舞台裏を見せる「ラジオ番組のなかのラジオ番組」は、コミュニティFMの放送局ならできるのではないかと感じました。実際に、これまでに立ち上げられたコミュニティFMや臨時災害放送局では、すでにそのようなことが起きているのではないのでしょうか。

「ラジオ番組」形式のイベントをどのように活用できるか

今回の市民科学講座は、コミュニティFMとは何なのかを分かりやすくするために、コミュニティFMのスタジオのようにしてみるといいのではないかとこの考えから企画しましたが、実際にやってみると、「ラジオ番組」形式をひとつの方法として洗練していくことができれば、もっといろんな可能性があるのではないかと感じました。

たとえば、「ラジオについてのラジオ番組」のイベントを公開録音として行うことができれば、録音したものをそのまま番組として聴いてもらうことができるのではないかと感じました。

コミュニティFMやラジオのみならず、音響技術について参加型のイベントとして、とても有効な方法なのではないかと感じました。レコードコンサートなどのように、見ているだけでも楽しいイベントにする方法として、ラジオ番組の形式は活用できるのではないかと感じました。

また、科学技術に関するトークイベントとしても、ゲストからのお話を引き出す方法として活用できるのではないかと感じました。今回については、「市民科学講座」としてはどうだったか、よく考えなければいけない点がありますが、実際のラジオ放送にはつながらなくても、ラジオ番組のように「トーク」という手法は、科学技術についてのコミュニケーションに活用できるのではないかと感じました。

今後は、これらの点も含めて、「マイクロフォン」スタディーズと称して、ラジオ番組の形式を活用したイベントを企画したいと考えています。

最後に、今回の市民科学講座は、ゲストの佐々木さんと長崎さんの「トーク」あってのものでした。このお二方とともに、このような「ラジオ番組」の形式で開催することに協力していただいた、金子智太郎さん、光塾の松尾さん、上田さんと関根さんをはじめとする市民科学研究所の関係者のみなさんに感謝したいと思います。

参考資料

総務省 電波利用ホームページ「コミュニティ放送局の特徴」

<https://www.tele.soumu.go.jp/j/adm/system/bc/commu/index.htm>

同上「コミュニティ放送の現状」

<https://www.tele.soumu.go.jp/j/adm/system/bc/now/>

総務省「コミュニティ放送の現状」(2016年)

http://www.soumu.go.jp/main_content/000401159.pdf

一般社団法人日本コミュニティ放送協会 (JCBA)

「コミュニティ放送の現況について」(2018年6月30日)

<https://www.jcba.jp/community/pdf/cfmgenkyou-jcba.2018.6.30.pdf>

参考文献

松浦さと子編著『日本のコミュニティ放送』晃洋書房、2017年

北郷裕美『コミュニティFMの可能性』青弓社、2015年

大内斎之『臨時災害放送局というメディア』青弓社、2018年

荒蝦夷編『その時、ラジオだけが聴こえていた』竹書房、2012年

デイヴィッド・グッドマン著、長崎励朗訳『ラジオが夢見た市民社会 アメリカン・デモクラシーの栄光と挫折』岩波書店、2018年